

京の隅から

副理事長 芳賀 徹

遅き日やこだま聞ゆる京の隅 蕪村

私は与謝蕪村のこのような句が好きだ。
これは蕪村(一七二六—一七八三)の最晩年の句だといふ。そのころ彼は「仏光寺烏丸西入ル町」に住んでいた。いまの烏丸四条から少し下つて、烏丸御所ホテルの先を西へ入る通りの一隅だったらしい。そうだとすれば、蕪村の時代でも、その住まいのあたりを「京の隅」というのは、ほんとうは当たらない。四条通りも錦小路もすぐ近いことだし、むしろ当時でも京の中心部であつたろう。

なにもこの句を蕪村は自宅で作ったとする必要はない。蕪村は晩年にいたるまで洛外を家族や門人たちと連れだつてそぞろ歩くのが好きだつたから、ほんとうにどこかの「京の隅」で、どこからか「こだまが聞こえてくるのを経験した」ことがあるのかもしれない。

だが、結局はどちらでもいいことなのだ。むしろ「仏光寺烏丸西入ル町」の自分の家で作つたとするほうが味わいが深くなり、面白い。蕪村という詩人は、広い山野を駆けめぐつたり、大通りを闊歩したりするよりは、隅っこにまがまつていたり、こもつていたりすることのほうが好きな人だつた。烏丸西入ル町の狭い家のなかでも、またその一隅に、小さな文机ぐらゐを前にして、まわりにはいろいろな和綴りの本を散らかしたまま、べたりと坐りこんで、あれこれと夢想に耽る、というのがとくに晩年の蕪村の一番好きな生活の姿藝であつた。

ちようどそんな恰好で、頭巾をかぶり、眼鏡を糸で耳にくくりつけ、右手を軽く肩にあてて、一冊の書物の表紙をのぞいている「蕪村翁像」というのがある。蕪村の俳諧と絵の門弟だつた松村月溪(号春の墨齋)の描いた。京の町のどまんなかに住んでいても、この詩人はそのような小さな親密なくつろぎの空間をいつも自分の身のまわりにつくりあげることができ

たし、つくりあげることが好んだのである。春も深くなつて、なかなか暮れない午後遅く(遅き日)、なにかものういままに、このいつもの自分の隅っこにじつと坐りこんでいると、どこか遠くから、ふと「こだまが聞こえてきた。おや、あれはなんのこだまだろう」と、一瞬、夢想からわれに返る。どこかで大工仕事でも始まつていて、槌の音かなにかがひびいてきたのだろうか。しばらくのあいだつづいて、こだまはまたいつのまにか消えてゆく。

幻聴だつたのだろうか、なごと思つていこううちに、「京の隅はまた深い静寂にもどつていく。どこかの田舎ではなく、みやこの町なかであるだけに、あのこだまはいつそう深くなつかしい静けさを身のまわりに呼びおこしてくれたのだろう。そして日暮れの遅い晩春の一日もようやくたそがれてゆく。

蕪村はこの「遅き日のみやこの同じ一隅に坐したまま、懐旧と題して遅き日のつもりで遠きむかしかな

との名句をよんだこともあつた。いつまでも暮れぬ春の日に呆然として座居していると、昔も、そのまた昔も、さらに遠い遠い昔も、こんなふうにして自分をもて余していたことがつきつきに思ひおこされてくる、といふのだらう。

このような「京の隅がいつまでもこの京都には残されていく欲しい。これこそが、都の文明の奥ゆきの深さを保証するものであらう。暗かりのあつた静かな片隅に坐つて、「つもりで遠きむかし」を思ひおこすことができるときは、はじめて人間は人間らしくなる。いまの日本で、そしておそろしく世界で、そのような奥ゆきの深さに立ち帰ることが出来るのは、もう京都においてしかないのかもしれない。国際京都学協会も、ときにはこの暗かりを見つめて、人間が人間らしくあつた姿を探ることをしよう。

(はがとおる)

基調講演 「京の川と歴史について」

武庫川女子大学教授 森谷尅久

平安京は長安や洛陽などをモデルに建設され、その根底に風水思想があった。青龍は鴨川に、玄武は船岡山、朱雀は巨椋池が相当した。西にかづぬ(葛野)川(現在の桂川)があり、南にはよどみ川(淀川)が巨椋池から流れ出すなど京都盆地はきわめて水資源に恵まれていた。この水に着目し京都に都をつくることになった。平安京の前の長岡京は葛野川の洪水で失敗した。

桓武、平城、嵯峨の三代までは、聖なる川として葛野川で天皇、内親王が禊ぎをした。その後、弘仁年間にはいり近くの鴨川で禊ぎをおこなうようになった。ところが、上賀茂や紫野は獵場であって狩猟の獲物を川で洗い血をぬぐい、聖なる川が汚れるなどの騒ぎもおこった。水問題で田畑を耕すことを禁止するなどの騒ぎもおこった。墾田を増やしたいという百姓の嘆願を聞き、菅原道真は許可を発令し人気を博した。聖なる川ということでは私にも個人的なエピソードがある。クリスチャンの母にキリスト教徒にさせられ、小さい頃に鴨川でどぼんと洗礼を受けたそうだ。

鴨川は暴れ川でもあり何度も洪水を起こしている。白河院は双六の賽、山法師とともに鴨川の水を「意の如くならざるもの」と言った。氾濫を重ねる川を鎮めるために防鴨河使という役所がおかれた。このように、平安時代の初期に洪水に対処するシステムができていた。

室町期に鴨川は朱雀川と改名された。当時、右京は水気が多く瘧の病気(マラリア)などで寂れた。人がどんどん東の方に移動し、鴨川を越えて街ができあがった。そのため、鴨川が京都の街の真ん中を流れることになり朱雀川という象徴的な名前になった。鴨川に堤防が出来たのは17世紀中頃である。寛文の堤がそれで、じつは徳川政権は存外、京都のために出費をしていた。両岸に堤がつくられ中州には床机が出されるようになった。先斗町もこのころ出来たものだ。

平安京は大きな都市だったが、広場というものがない珍しい都市だった。広場の役割を果たしたのが鴨の河原であり、勧進興行、芸能の興行がくりひろげられた。街の中心に糺河原、三条河原、五条河原などという民衆の広場ができたことは、文化史的にも重要なことだった。

シンポジウム 「私と鴨川のかかわりについて」

「鴨川はあぶない」

河川工学が専門で淀川水系流域委員会にも参加しているが、非常に日本の川が悪くなっているので川づくりを変えたいと考えている。まず治水だが、洪水の発生を予防はできない。いざ発生した時に壊滅的な被害を避けるという発想が必要だ。ついで利水だが、川の水を全部使いきろうという時代があったが、それが間違いだった。さらに環境ということが大事で、昔のように水で遊んだり、釣った魚を食べたりといった水の環境をよくしたい。

わたしはつねづね鴨川は危ないと言ってきた。昭和10年に鴨川洪水があったが、水防活動のおかげで何とか持ちこたえて街が水浸しになることはまぬがれた。とはいっ

京都大学名誉教授 今本博健

でも鴨川の安全性をぜひ考えてほしい。工学部の学生時代に鴨川で測量の実習をして、左岸と右岸の堤防の高さが違うことに気が付いた。じつは河川というのは、万一洪水になった場合を考え、どちらかに水が溢れるようになっているのだ。天井川が多い日本の川としては、鴨川は珍しく堀込み河川で低いところを水が流れているが、じつは弱点もある。もし堤防が切れたら京都の街中は水浸しになる。川というのは、どこまで安全にすればいいのだろうか。堤防を高くしたらいいといっても反対が多いだろう。だが危険な個所があるのだから、今後ともどう鴨川とつきあっていくのか考える必要がある。

「命をはぐくむ水を大切に」

岩屋山志明院住職 田中真澄

志明院は829年に勅命で空海が来山されたことにはじまる。そのときに北山の童子が現れて滝壺に龍の化身となって入られた。今も飛龍の滝に堂を建てお祈りをしている。鴨川の上流域では水を汚してはならないと、峠の向こうに死者を運んだり、おむつも洗わないなど制約を守ってきた。『ダムと和尚』の紹介をいただいたが、十数年前に鴨川のダム建設計画に反対したのは、源流の森を守れば、下流域の安全を守ることができ、きれいな水も流すことが可能だとかんがえたからだ。

歴史をひもとくと御所のご用材など木材需要のため何度も鴨川上流の森林が伐採された。道長の時代には無量寿院の用材に上流から大量の木材が筏で運ばれた。源流の森と下流の流域という、現代にも通ずる問題が繰り返されてきた。その意味でこの秋に京都府が鴨川流域を守る総合条例制定の動きを示したのは画期的なことだ。鴨川全体の治水や環境、景観などに各分野で知恵を出し合いたいものだ。

森の豊かさが鴨川の清流を守ることを教育してゆきたい。志明院には小学生が環境学習に来てくれる。山門前の湧き水を飲むのにためらう子供に、これこそ山が浄化した生まれたての水だと説明し、本物の水を体験させている。宗教的な話になるが、産湯や若水などにみられる、水への畏敬の念を今一度思い起こす必要がある。「地水火風空のうちより出し身の たどり帰る元の住処に」という句があるが「命をはぐくむ水」を大事にすることを、川の源流から今後とも発信して行きたい。

「鴨川、セーヌ川、ブルタバ川」

京都精華大学教授 嘉田由紀子

京都、パリ、プラハ三都市の比較から洪水への対処を考えてゆこう。バン格拉デシュなどは折り込み型である。セーヌ川やブルタバ川は、溢水受容型で洪水をある程度受け止め、人間の知恵で乗り切ろうとする。近代以前の日本の川もこの型にはいった。現代の日本は河道閉じこめ管理型であるが、もし管理が出来ない場合は怖い。

昭和10年の鴨川水害のスライドをみると、三条大橋をはじめ38の橋のほとんどが流失し、木屋町や先斗町も浸水している。その後、河川改修をして荒神橋で最大650トンの流量に耐えることになっているが危険は残っている。下水道の整備の結果、雨水が集まり急に水量が増えることになった。

セーヌ川の場合は洪水情報を共有しリスクを社会で受け止めようと言う意識が明確である。治水省には過去の水害の記録が残っており、浸水の記憶を伝達することは義務だと言っている。京都のこどもたちと一緒に調査に行ったブルタバ川は、2002年8月に大洪水をおこし、地下鉄も冠水したが死者は一人も出なかった。情報の共有がしっかりしており住民の避難活動がうまくすすんだ。あれほどの洪水の後でも堤防はつくらないといていた。これら外国の都市を参考に京都の鴨川のことを考えねばならない。危険情報を共有しながら、川と人とがつながっているといった文化を構築してゆきたい。

「清流の流れる町京都」

武庫川女子大学教授 森谷尅久

京都には鴨川のほかに溝といったほうがいい小河川がたくさん走っていて、この清流が都市生活に利用されていた。平安時代から溝掃除という慣習があって、北の方から順番にしていた。この伝統は中世以降もずっと続き、つい最近までであった。私も中京に住んでおり、年に4、5回は日曜に全町内が出て溝の掃除をした。夏なら終わった後に床机を出してビールを飲んだりして、コミュニティの形成には欠かせない行事だった。

前の嘉田さんの話しにあったように今日のように近代化される前のパリの惨状にくらべると、江戸や京都ははるかに清潔な都市だった。トイレの問題も汲み取りの組織がちゃんと決められており、近郊の嵯峨野や西の京といった農村と交流があった。共同のトイレも江戸時代から六角や木屋町にあった。豊富な水に恵まれたこと、そしてこれらのシステムや施設が存在したことを合わせ考えると、京都は都市衛生は早くから完成していたといえるのではないか。



西陣町家くらし体験会に参加して

あたらしく企画された第1回見学体験会に参加するため、2004年10月17日(日)に西陣の富田屋さんを訪問した。上京区大宮通一条上ル、「千両ヶ辻」という思いがけず広げた道路に面して、風格のある構えのお宅である。明治18年に九代富田屋藤兵衛が建てた家屋で、京町家のなかでも西陣の商家の様式を残しており、平成11年には国の有形登録文化財に指定されている。

当日の参加者は国際京都学協会の会員14名に、京都大学で学ぶロシア・中国の女子留学生2名が飛び入り参加。ひとりとは和服姿で色を添えてくれた。各部屋を案内していただいたあと、富田屋女将の田中峰子さん(本協会常務理事)に町家のくらしについてお話をうかがった。「毎朝、家中の神さんに炊きたてのご飯とお水を供えて一日が始まります」。「神さんのお水は、金・銀の二つある井戸のうち、金の井戸から汲み上げることになってます」。「正月には恵方棚を吊すなど、季節ごとの行事や決まり事をきちんと守るのがたいへんです」。「五月の節句のお飾りをかたづけけたと思うと、すぐに夏に備え襖や障子を簾や葦戸に換え、網代や藤の敷物を用意するのに大忙しといったぐあい

です」など。京都の暮らしやしきたりを守るため、ご苦労もかかずあるようだ。富田屋は町家のくらしと文化を紹介するため一般に開放しているが、興味をもって訪れる外国人の姿も多いとか。

奥のお茶席で抹茶をいただいたあと、能も演じられることがあるという広いお座敷で豪華な弁当をよばれ、一同まったく極楽気分浸った。食事のあとは全員がうちそろい、今年の恵方に当たる近くの晴明神社に足を運んだ。晴明神社の明るい境内は若い人を中心に参拝者がひきまきらない様子。拝殿に上がりそろってお祓いを受けたあと、宮司様から昨今の神社の陰陽師ブームにまつわるお話をうかがうことができ良い勉強になった。楽しい体験をもつことができ、のどかな秋の一日を満喫した素晴らしい見学体験会だった。

(M. A生)



鶏も ばらばら時か 水鶏なく (去来)

国際京都学協会も発足後二年目にはいりましたが、新年度を迎えていっそうの飛躍が求められています。今年度の取り組みと致しましては、前年度からの研究会「京の川シリーズ」を継続してゆくほか、体験見学会をはじめ交流サロン事業などの新しい試みもすすめて参りたいと考えております。どうぞご期待とご協力の程よろしく申し上げます。

せんだっての京都・観光文化検定試験(京都検定)には、地元の京都はもとより全国各地から1万人もの受験者が集まったとのこと。かずかずの設問の中には「ジュンサイな人」とか「ほたえる」など、京ことばの微妙な意味を問う、なかなかの難問もふくまれていたようです。京都弁には含蓄のある表現がいろいろありますが、わたしたち国際京都学協会の活動も、口の辛い京都のひとびとから「いちびりよって」とか「きばらな、あかんえ」(秦恒平『京のわる口』平凡社)といった冷やかしがはいらないよう、一步一步着実に進めてゆきたいと考えております。ご指導ご協力賜りますよう、よろしくお願ひ致します。(事務局)